子どもの闘病支えるファシリティドッグ育成　平沢さん

TOKYO　次代の案内人

#東京 #関東 #健康・医療

2023/3/7 15:00 [有料会員限定]

平沢さんは「看護師の経験を犬のトレーニングに生かしたい」と話す（訓練先の横浜市）

ファシリティドッグは病院で活動するため育成された犬のこと。日本では、重い病気の子どもたちの心のケアを担う。認定NPO法人シャイン・オン・キッズ（東京・中央）の平沢佳奈さん（35）は国内初の育成トレーナーだ。看護師のキャリアも生かし、新天地のチームで飛躍を期す。

オスの大型犬「ニック」はファシリティドッグの候補生。1年前にオーストラリアからやってきた。まもなく2歳で、人間なら18〜20歳に相当する。平沢さんと共同生活を送り、専門的なトレーニングを受ける。

ファシリティドッグは子ども病院に常駐し、一緒に遊び、治療の時や手術の前に寄り添う。看護師の資格を持つハンドラーとペアを組み、「コマンド」と呼ばれる指示で動く。「snuggle（スナグル）」は添い寝のこと。前脚をそろえて人の膝の上に体を預ける「lap（ラップ）」など、ニックが覚えるコマンドは100種類ほどある。

平沢さんは2022年、米国留学などで培ったスキルを買われ、シャイン・オン・キッズに入って日本人初の育成トレーナーになった。守備範囲は広い。現在、4つの病院で活躍する4頭のメンタルチェックを担当し、獣医やハンドラーと活動計画を練る。ハンドラー候補の人材育成も大事だ。動物行動学と教育学。海外の実践手法を取り入れ、座学や実習のメニューを拡充する。

子どもの頃、障害者に寄り添う補助犬の仕事にあこがれた。大学の看護学部を卒業し、看護師の道に進んだのも「補助犬の育成トレーナーに」という大きな目標があったからだ。

看護師の仕事を辞めて、単身米国へ――。9年前のあの当時、同じ夢の軌跡を一足先に実現した女性がいた。国内初のファシリティドッグ「ベイリー」のハンドラーで活躍していた森田優子さんだ。初対面の平沢さんの良き理解者として渡米の背中を押してくれた。今はシャイン・オン・キッズの頼れる先輩だ。

ニックと触れ合う女性㊨は「入院中の子どものためにも頑張る」と話す（横浜市のリラのいえ）

ニックの訓練先で介護施設や保育園が参加。地域の協力で国内の育成環境を整えるなか、新たな交流が芽吹く。「リラのいえ」（横浜市）は難病の子どもを持つ家族が集う施設。ニックと触れあい、心を癒やされる母親たちの姿に「大人のケア」の大切さを感じる。

「病院をこわい所でなくするまほうだった」。3年前にこの世を去ったベイリーへの子どもの感謝の言葉が残る。まほうの世界を広げることが、平沢さんたちチームの大きな仕事だ。（山本啓一）

日本で歴史浅く　活動資金や人材不足が課題

ファシリティドッグは米国発祥だ。日本での歴史はまだ浅く、2010年に静岡県立こども病院（静岡市）で初めて導入され、海外で育成されたベイリーが派遣された。心のケアを担う役割の犬としては各地の施設を訪問するセラピードッグがいるが、ファシリティドッグは1つの施設に常駐する。育成の方法をひとつとっても大きな違いがある。

現在、4つのこども病院がファシリティドッグを導入する。普及には活動資金の確保が長年の課題になっている。ハンドラーの人件費や餌代などで年間1000万円が必要で、法人や個人からの寄付ではまかないきれないという。小児科の看護師の人材不足でハンドラーの確保が難しい面もあるという。